

令和 3 年 5 月 27 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02492

研究課題名(和文) 英仏百年戦争期における海峡横断的文学圏の形成に関する一考察

研究課題名(英文) A Study on the Formation of a cross-Channel literary community during the Hundred Years' War

研究代表者

小林 宜子 (Kobayashi, Yoshiko)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：80302818

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、英仏百年戦争期のイングランドの詩人ジョン・ガワールの三言語(英語、仏語、ラテン語)による詩作品を収録した大英図書館蔵 BL Additional 59495写本(一般にトレンサム写本と呼ばれる)の内容の分析を根幹に据え、この書物が英仏二国間の恒久的な平和を願って制作されたものであることを明らかにするとともに、それらの詩作品の創出の母体となった海峡横断的でトランスナショナルな文学圏の成立に関して多角的な視点から検証を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ジョン・ガワールの作品を研究するうえでは、これまで彼の主要作品とされる長篇の英詩『恋する者の告解』(Confessio Amantis)に研究者の関心が偏る傾向が見られたが、近年になって、英語以外の言語で書かれた詩作品に対しても急速に関心が高まりつつある。本研究は、trilingual poetとしてのガワールの詩作活動の全般を視野に収めたものであり、言語間、国家間、学問領域間の狭間に埋もれがちであったガワールの仏語作品の再評価を促すという意義を有した。と同時に、英仏比較文学研究の新たな可能性を示唆することにも貢献し得たと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study is structured around a detailed analysis of the poetic texts composed in three languages (English, French, and Latin) by the medieval English poet John Gower during the Hundred Years' War and gathered together in London, British Library, MS Additional 59495, commonly known as the Trentham manuscript. It has demonstrated that the Trentham collection was carefully designed to give expression to Gower's ardent wish for the establishment of permanent peace between England and France; and, in doing so, it has also examined from multiple perspectives the cross-Channel and transnational literary relationships that gave rise to Gower's multifaceted trilingual oeuvre.

研究分野：人文学

キーワード：中世英詩 ジョン・ガワール 書簡体詩 教訓詩 バラード 海峡横断的文学 中世フランス語詩

1 . 研究開始当初の背景

ニューヨーク市のフォーダム大学を拠点とする“The French of England”プロジェクトの開設以来、中世後期の英語文学と仏語文学の関係に新たな光が投げられつつある。かつては、ジェフリー・チョーサーやジョン・ガワーの英詩に見られる同時代のフランス宮廷詩の影響など、ナショナルな枠組みを保持したまま個々の作品間の(概して一方通行的な)影響関係が論じられることが一般的であった。しかしながら、イングランド国内で使用された種々のフランス語や、イングランドで書かれた膨大な数に及ぶフランス語の文書(文芸作品のほか、法律文書や行政文書、外交文書、交易文書、宗教書などが含まれる)の存在に注目が集まる中、文学研究の領域でも、Middle English, Insular French, Continental French の間の複雑な関係性への関心が高まっている。と同時に、百年戦争を背景に行われた英仏間の度重なる和平交渉が両国間の文学的交流を加速化させ、同一の問題意識と文学的嗜好に支えられた海峡横断的な知的共同体の形成を促したことも複数の批評家により指摘されている。重要なのは、そうした共同体の諸相を解明するためには、ナショナルな言語観や文学観に立脚したままの比較文学的アプローチでは不十分であり、「文化の共有」という観点からの新たな考察が必要だという点である。

そうしたトランスナショナルな文学圏の存在を示す興味深い事例のひとつとして、本研究は1400年頃に制作されたとされる大英図書館蔵 BL Additional 59495 写本(一般に「トレンサム写本」と呼ばれる)に注目した。ジョン・ガワーの作品のみを収録したこの写本は、*To King Henry the Fourth in Praise of Peace* と称される英語の詩と、フランス語で書かれた二篇のバラード連作(*Cinkante Balades, Traitie pour essampler les amantz marietz*)を中心に構成されており、複数のラテン語の短詩がその間に配置されている。最初の英詩と *Traitie* にはいずれもライム・ロイヤルのスタンザ形式が採用されており、同数の詩行(385行)が含まれていることから、写本全体にシンメトリカルな構造をもたらし、細心の注意が払われたことが窺われる。最近の研究では、写本の一部がガワー自身によって筆写された可能性が指摘されており、写本自体の注目度も高まりつつある。

研究代表者は2014年7月にニューヨーク州で開催された The Third International Congress of the John Gower Society、および2015年5月に開催された日本英文学会第87回全国大会のシンポジウムで *To King Henry the Fourth in Praise of Peace* に関する試論を発表した。即位して間もないヘンリー四世宛の書簡という体裁を帯びたこの作品は、詩が執筆された当時のイングランド国内の政治的状況に照らして解釈されることが多く、新王の王権強化に資するような国王賛美と、武力による王位篡奪を経て王朝が交代したことへの言外の批判が織り合わされてきた複層的な作品として読まれてきた。こうした従来の解釈によれば、詩の主要なテーマである「平和」とは、国の内部における政治的対立の解消と安定した社会の構築を意味することになるが、研究代表者はこうした解釈に異議を唱え、この詩はむしろ当時のイングランドを取り巻く国際的な状況を視野に入れて解釈されるべきであり、英仏戦争の終結と、その付随的な結果としてもたらされる教会大分裂の解決こそが、この詩が推奨する「平和」の主要な意味であると主張した。

本研究は、こうした考察を敷衍させる形で着想されたものである。

2 . 研究の目的

本研究は、日米の学会で発表した前述の試論を敷衍させ、英仏語の詩を収めたトレンサム写本が英仏二国間の恒久的な和平を願って制作されたものであるとの解釈に基づき、以下の三つの

視点からこれまでの研究を発展させるものとして構想された。

(1) *To King Henry the Fourth in Praise of Peace* をトランスナショナルな文脈の中に明確に位置づけ、英仏戦争が長期化する中で、二国間の和平と西欧キリスト教世界の統一を希求した英仏両国の一群の詩人や著述家たちによる文学的運動の一環としてこの詩を捉え直すことを第一の目的とした。

(2) *To King Henry the Fourth in Praise of Peace* は前述の通り、ヘンリー四世宛の書簡という体裁を帯びているが、百年戦争期の海峡横断的文学圏の活動を特徴づけるものとして、書簡体形式の多用という傾向が認められることに着目し、そのことが、公共善の促進を自らの使命と捉える public poet (もしくは public writer) としての作者像の形成に寄与していることを明らかにしようと試みた。

(3) 百年戦争期の英仏両国におけるバラードの流行を海峡横断的文学圏のもうひとつの特徴と見なし、トレンサム写本に収録されたガワーによる二篇の伝語バラード連作のほか、それらとほぼ同時期に書かれたフランス語による複数のバラード集を考察の対象に加え、historical formalism の見地から分析を行なった。

3. 研究の方法

トレンサム写本に含まれるガワー作品の再評価をめざし、その創出の母体となった百年戦争期の海峡横断的な文学圏の成立を複数の視点から考察するために、前項で述べた三つの研究テーマのそれぞれに一年ずつ(ただし、最終年度に補助事業期間の延長を申請したため、(3) に関しては二年)を費やして以下の方法で研究を遂行した。

(1) *To King Henry the Fourth in Praise of Peace* を取り巻くトランスナショナルな文脈を明らかにするため、1380年代から90年代にかけて一貫して英仏間の和平の必要性を説き、両国王の主導による大規模な聖地十字軍の構想を練り上げたフィリップ・ド・メジエール、彼が平和の「伝道者」としてイングランドに派遣したオトン・ド・グランソン、英仏間の和平交渉に参加した経験のあるユスターシュ・デシャンとオノレ・ボヴェ、自らの作品中でボヴェを師と仰ぎ、フランス国王の宮廷で重用されたクリスティーヌ・ド・ピザンの著作の詳細な分析を試みた。

(2) ガワーの作品中には *To King Henry the Fourth in Praise of Peace* 以外にも書簡体のテキストが複数存在するため、そうしたテキスト間の内容および形式上の連関を考察するとともに、同じく書簡体の形式を帯びたユスターシュ・デシャン、クリスティーヌ・ド・ピザン、ジェフリー・チョーサー、トマス・ホックリーヴの作品を考察の対象とし、各作品において作者のアイデンティティがどのように形成され、読者との関係がどのように構築されているかを分析した。

(3) トレンサム写本がヘンリー四世の即位を祝して制作された写本であることを踏まえ、*Cinkante Balades* がヘンリーの嗜好を反映して構想されたものであることを証明した。また、ガワーが *Cinkante Balades* の執筆に至った背景を解明する過程で、オトン・ド・グランソンやクリスティーヌ・ド・ピザンによるバラード連作を比較の対象とし、形式と内容の両面から分析を行なった。

4. 研究成果

ここでも、上記2. に記した三つのテーマに沿って、それぞれの研究成果を報告する。

(1) 2017年度は、トレンサム写本に含まれるガワールの英詩 *To King Henry the Fourth in Praise of Peace* の創作を取り巻くトランスナショナルな文脈として、英仏間の恒久的な平和と西欧キリスト教世界の統一を希求した英仏両国の一群の詩人や作家たちによる文学運動を考察した。第一に、この文学運動の中核に位置したフランスの著述家フィリップ・ド・メジエールの代表作である *Epistre au roi Richart* と *Songe du vieil pelerin* を分析の対象とし、彼が平和の「伝道者」としてイングランドに派遣した詩人オトン・ド・グランソンの政治的・文学的活動についても調査した。次に、グランソンの友人であったユスターシュ・デシャンの著作の中から、教会大分裂を批判し、平和を擁護して書かれた *Complainte de l'Eglise*、および同種の主題を扱った複数のバラードを選び、分析した。さらに、英仏間の和平交渉にイングランド側から参加したルイス・クリフォードとジェフリー・チョーサー、グランソン、デシャンの間の交友関係に注目し、海峡横断的な文学圏の形成を支えた人的交流の実態の解明に努めた。さらに、次年度の研究を先取りする形で、ガワールの作品の一部に見られる書簡性という特徴に着目し、修辞学とジャンル研究の観点からその文学的・政治的な意味の分析を試みた。2017年度の成果の一部は、7月に英国のダラム大学で開催された IV International Congress of the John Gower Society、および11月に奈良の大和文華館で開催された *Ménestrel au Japon* において口頭で発表した。

(2) 2018年度の前半では、前年度に未完に終わった調査（教会大分裂や戦争をテーマとして書かれたオノレ・ボヴェとクリスティーヌ・ド・ピザンの著作の調査）を実施し、前年度の研究成果を3編の論文にまとめ、各々異なる論文集に寄稿した。このほかに、2018年度の当初の計画を遂行すべく、以下の研究を実施した。百年戦争後期に英仏両国の詩人によって頻繁に用いられた書簡体形式に着目し、この形式の使用が public poet としての作者のアイデンティティを確立するうえで重要な手段になっていたことを下記の方法で明らかにした。第一に、トレンサム写本制作以前に書かれたガワールの作品のうち、*Vox Clamantis* と *Confessio Amantis* の中に書簡体のテキストが含まれており、同写本に収録された *Cinkante Balades* の一部が作者自身によって書簡と定義されていることから、これらの作品と *To King Henry the Fourth in Praise of Peace* との関連性を考察した。第二に、同じく書簡体の形式を帯びたユスターシュ・デシャンの *Complainte de l'Eglise*、クリスティーヌ・ド・ピザンの *Epitre au dieu d'amour* と *Epitre d'Othea*、前者の英訳であるトマス・ホックリーヴの *Letter of Cupid*、および特定の人物への書簡として創作されたチョーサーの数篇のバラードを考察の対象とし、各々の作品において作者のアイデンティティがどのように形成され、読者との関係がどのように構築されているかを分析した。第三に、修辞学の一分野として中世のヨーロッパで発達した「書簡作文法 *ars dictaminis*」の伝統と Aegidius Romanus の君主論に代表される助言文学の伝統を再検証し、*To King Henry the Fourth in Praise of Peace* の public writing としての性格を、それらの伝統との関連において分析した。

(3) 2019年度の研究においては、まず *To King Henry the Fourth in Praise of Peace* がチョーサーの諸作品と並んで収録された1532年刊行の『チョーサー作品集』を分析することにより、ガワールの詩の教訓的意義が時代を超えて宗教改革期においても認められ、評価されていたことを明らかにした。この調査結果をまとめた論文は、2020年刊行の論文集 *John Gower in*

Manuscripts and Early Printed Books (Boydell & Brewer) に収録されている。このほかに、上記の詩と並んでトレンサム写本に収められているガワーの伝語バラード連作 *Cinkante Balades* の分析を進めた。その際、1380年代に編まれ、フランス国内で高い人気を誇ったバラード集 *Livre des cent ballades* との類似性に着目し、このバラード集の執筆者のひとりがランカスター家に長年仕えた Jean d'Auberchicourt の親戚にあたり、別の執筆者 Jean Boucicaut にもランカスター家との接点があったこと、またこのバラード集の続編を書いたオトン・ド・グランソンがヘンリー・ボリングブルック(後のヘンリー四世)に随伴して聖地巡礼を果たしていることなど、個々の歴史的事実を積み上げながら、*Cinkante Balades* とヘンリーとの関わり、またその成立に至った背景を解明した。併せて、*Livre des cent ballades* との関連性が深いとされるグランソンのバラード、およびクリスティーヌ・ド・ピザンの *Cent ballades d'amant et de dame* と比較しつつ、ガワーの伝語バラード集がこれらの作品と同じく *Livre des cent ballades* の延長線上に位置する作品として構想された可能性を指摘した。さらに、ガワーの死後、1415年から25年間、イングランドの宮廷に捕虜として滞在し、英仏両言語で詩作を行なったシャルル・ドルレアンのバラードを研究対象に加え、ガワーの *Cinkante Balades* との比較研究を試みた。その結果、百年戦争期の英仏両国の宮廷文学が双方向に影響を与え合い、バラード連作への深い関心の特徴とする緊密なネットワークを構築していった過程を明らかにすることができた。

2020年度の研究においては、上記の考察に加え、トレンサム写本に収録されたガワーのもうひとつの伝語バラード連作 *Traitié pour essampler les amantz marietz* の考察にも着手した。その際、夫婦愛を平和的で安定した社会の基盤と捉えるガワーの発想に、フィリップ・ド・メジエールやオノレ・ボヴェの思想との類似性が認められることを確認した。その成果を2020年6月29日から開催予定であった国際会議 2020 V International Gower Congress で発表すべく、本課題の補助事業期間延長を申請し承認されたが、コロナ禍のため、会議の開催は2023年に延期された。その会議において、本課題の成果の一端を発表する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yoshiko Kobayashi	4. 巻 98
2. 論文標題 Gower	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Year's Work in English Studies	6. 最初と最後の頁 236-242
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Yoshiko Kobayashi	4. 巻 97
2. 論文標題 Gower	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Year's Work in English Studies	6. 最初と最後の頁 262-264
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Yoshiko Kobayashi
2. 発表標題 In Praise of European Peace: Gower's Verse Epistle in Thynne's 1532 Edition of Chaucer's Workes
3. 学会等名 IVth International Congress of The John Gower Society（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoshiko Kobayashi
2. 発表標題 In Search of Anglo-French Peace: The Didactic Epistles of John Gower and Philippe de Mezieres
3. 学会等名 Menestrel au Japon（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Martha Driver, Derek Pearsall, and R. F. Yeager (eds.) (分担執筆: Yoshiko Kobayashi)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Boydell & Brewer	5. 総ページ数 322 (分担執筆: 231-246)
3. 書名 John Gower in Manuscripts and Early Printed Books (分担執筆: "In Praise of European Peace: Gower's Verse Epistle in Thynne's 1532 Edition of Chaucer's Workes")	

1. 著者名 Russell A. Peck and R. F. Yeager (eds.) (分担執筆: Yoshiko Kobayashi)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 D. S. Brewer	5. 総ページ数 392 (分担執筆: 204-222)
3. 書名 John Gower: Others and the Self (分担執筆: "Letters of Old Age: The Advocacy of Peace in the Works of John Gower and Philippe de Mezieres")	

1. 著者名 江川温/マルク・スミス/田邊めぐみ/ハンノ・ウェイスマン (共編) (分担執筆: 小林宜子)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 359 (分担執筆: 121-138)
3. 書名 東西中世のさまざまな地平ーフランスと日本の交差するまなざし (分担執筆: 「英仏間の和平を求めてージョン・ガワーとフィリップ・ド・メジエールの教訓的書簡」)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------